

赤いろうそくと人魚

小川未明

青空文庫

人魚は、南の方の海にばかり棲んでいたのでありません。北の海にも棲んでいたの
 であります。

北方の海の色は、青うごぎいきました。あるとき、岩の上に、女の人魚があがつて、
 あたりの景色をながめながら休んでいました。

雲間からもれた月の光がさびしく、波の上を照らしていました。どちらを見ても限りな
 い、ものすごい波が、うねうねと動いているのであります。

なんという、さびしい景色だろうと、人魚は思いました。自分たちは、人間とあま
 り姿は変わっていない。魚や、また底深い海の中に棲んでいる、気の荒い、いろいろな
 獣物などくらべたら、どれほど人間のほうに、心も姿も似ているかしのれない。それだ
 のに、自分たちは、やはり魚や、獣物などといっしよに、冷たい、暗い、気の滅入りそう
 な海の中に暮らさなければならぬというのは、どうしたことだろうと思いました。

長い年月の間、話をする相手もなく、いつも明るい海の面をあこがれて、暮らしてき

たことを思いますと、人魚はたまらなかつたのであります。そして、月の明るく照らす晩に、海の面に浮かんで、岩の上に休んで、いろいろな空想にふけるのが常であります。

「人間の住んでいる町は、美しいということだ。人間は、魚よりも、また獣物よりも人情があつてやさしいと聞いている。私たちは、魚や獣物の中に住んでいるが、もつと人間のほうに近いのだから、人間の中に入って暮らされないことはないだろう。」と、人魚は考えました。

その人魚は女でありました。そして妊娠でありました。……私たちは、もう長い間、このさびしい、話をするものもない、北の青い海の中で暮らしてきたのだから、もはや、明るい、にぎやかな国は望まないけれど、これから産まれる子供に、せめても、こんな悲しい、頼りない思いをさせたくないものだ。……

子供から別れて、ひとり、さびしく海の中に暮らすということは、このうえもない悲しいことだけれど、子供がどこにいても、しあわせに暮らしてくれたなら、私の喜びは、それになりましたことはない。

人間は、この世界の中で、いちばんやさしいものだと言っている。そして、かわいそ

うなものや、頼りないものは、けっしていじめたり、苦しめたりすることはないと聞いて
 いる。いったん手づけたなら、けっして、それを捨てないとも聞いている。幸い、私たち
 は、みんなよく顔が人間に似ているばかりでなく、胴から上は人間そのままなのであ
 るから——魚や動物の世界でさえ、暮らされるところを思えば——人間の世界で暮らさ
 れないことはない。一度、人間が手に取り上げて育ててくれたら、きつと無慈悲に捨て
 ることもあるまいと思われる。……

人魚は、そう思ったのでありました。

せめて、自分の子供だけは、にぎやかな、明るい、美しい町で育てて大きくしたいとい
 う情けから、女の人魚は、子供を陸の上に産み落とそうとしたのであります。そうすれ
 ば、自分は、ふたたび我が子の顔を見ることができぬかもしれないが、子供は人間の仲
 間入りをして、幸福に生活ができることができるであろうと思っただけです。

はるか、かなたには、海岸の小高い山にある、神社の燈火がちらちらと波間に見え
 ていました。ある夜、女の人魚は、子供を産み落とすために、冷たい、暗い波の間を泳
 いで、陸の方に向かって近づいてきました。

二

海岸に、小さな町がありました。町には、いろいろな店がありましたがお宮のある山の下に、貧しげなるうそくをあきなっている店がありました。

その家には、年よりの夫婦が住んでいました。おじさんがろうそくを造つて、おばあさんが店で売っていたのであります。この町の人や、また付近の漁師がお宮へおまいりをするときに、この店に立ち寄つて、ろうそくを買つて山へ上りました。

山の上には、松の木が生えていました。その中にお宮がありました。海の方から吹いてくる風が、松のこずえに当たつて、昼も、夜も、ゴーゴーと鳴っています。そして、毎晩のように、そのお宮にあがつたらうそくの火影が、ちらちらと揺らめいているのが、遠い海の上から望まれたのであります。

ある夜のことでありました。おばあさんは、おじいさんに向かつて、
「私たちが、こうして暮らしているのも、みんな神さまのお蔭だ。この山にお宮がなかったら、ろうそくは売れない。私どもは、ありがたいと思わなければなりません。そう思つたついでに、私は、これからお山へ上つておまいりをしてきましょう。」といいました。

「ほんとうに、おまえのいうとおりだ。私も毎日、神さまをありがたいと心ではお礼を申さない日はないが、つい用事にかまけて、たびたびお山へおまいりにゆきもしない。いいところへ気がつきなされた。私の分もよくお礼を申してきておくれ。」と、おじいさんは答えました。

おばあさんは、とぼとぼと家を出かけました。月のいい晩で、昼間のように外は明るかったのであります。お宮へおまいりをして、おばあさんは山を降りてきますと、石段の下に、赤ん坊が泣いていました。

「かわいそうに、捨て子だが、だれがこんなところに捨てたのだろう。それにしても不思議なことは、おまいりの帰りに、私の目に止まるというのは、なにかの縁だろう。このまに見捨てていっては、神さまの罰が当たる。きつと神さまが、私たち夫婦に子供のないのを知って、お授けになったのだから、帰っておじいさんと相談をして育てましょう。」と、おばあさんは心の中でいって、赤ん坊を取り上げながら、

「おお、かわいそうに、かわいそうに。」といって、家へ抱いて帰りました。

おじいさんは、おばあさんの帰るのを待っていますと、おばあさんが、赤ん坊を抱いて帰ってきました。そして、一部始終をおばあさんは、おじいさんに話しますと、

「それは、まさしく神さまのお授け子だから、大事にして育てなければ罰が当たる。」と、おじいさんも申しました。

二人は、その赤ん坊を育てることにしました。その子は女の子であつたのです。そして、胴から下のほうは、人間の姿でなく、魚の形をしていましたので、おじいさんも、おばあさんも、話に聞いている人魚にちがいないと思ひました。

「これは、人間の子じゃあないが……。」と、おじいさんは、赤ん坊を見て頭を傾けました。

「私も、そう思います。しかし人間の子でなくても、なんと、やさしい、かわいらしい顔の女の子でありませんか。」と、おばあさんはいいました。

「いいとも、なんでもかまわない。神さまのお授けなされた子供だから、大事にして育てよう。きつと大きくなつたら、りこうな、いい子になるにちがいない。」と、おじいさんも申しました。

その日から、二人は、その女の子を大事に育てました。大きくなるにつれて、黒目勝ちで、美しい頭髪の、肌の色のうす紅をした、おとなしいりこうな子となりました。

娘は、大きくくなりましたけれど、姿が変わっているの、恥ずかしがって顔を外へ出しませんでした。けれど、一目その娘を見た人は、みんなびっくりするような美しい器量でありましたから、中にはどうかしてその娘を見たいと思つて、ろうそくを買いにきたものもありました。

おじいさんや、おばあさんは、

「うちの娘は、内気で恥ずかしがりやだから、人さまの前には出ないのです。」といつていました。

奥の間でおじいさんは、せつせとろうそくを造つていました。娘は、自分の思いつきで、きれいな絵を描いたら、みんな喜んで、ろうそくをかうだろうと思ひましたから、そのことをおじいさんに話しますと、そんならおまえの好きな絵を、ためしにかけてみるがいと答えました。

娘は、赤い絵の具で、白いろそくに、魚や、貝や、または海草のようなものを、産まれつきで、だれにも習つたのではないが上手に描きました。おじいさんは、それを見

るとびつくりいたしました。だれでも、その絵を見ると、ろうそくがほしくなるように、その絵には、不思議な力と、美しさがこもっていたのであります。

「うまいはずだ。人間ではない、人魚が描いたのだもの。」と、おじいさんは感嘆して、おばあさんと話し合いました。

「絵を描いたろうそくをおくれ。」といつて、朝から晩まで、子供や、大人がこの店頭へ買いにきました。はたして、絵を描いたろうそくは、みんなに受けたのであります。

すると、ここに不思議な話がありました。この絵を描いたろうそくを山の上のお宮にあげて、その燃えさしを身につけて、海に出ると、どんな大暴風雨の日でも、けつして、船が転覆したり、おぼれて死ぬような災難がないということが、いつからともなく、みんなの口々に、うわさとなつて上りました。

「海の神さまを祭つたお宮さまだもの、きれいなろうそくをあげれば、神さまもお喜びなさるのにきまつている。」と、その町の人々はいいました。

ろうそく屋では、ろうそくが売れるので、おじいさんはいっしょうけんめいに朝から晩まで、ろうそくを造りますと、そばで娘は、手の痛くなるのも我慢して、赤い絵の具で絵を描いたのであります。

「こんな、人間並でない自分をも、よく育てて、かわいがってくださったご恩を忘れてはならない。」と、娘は、老夫婦のやさしい心に感じて、大きな黒い瞳をうるませたこともあります。

この話は遠くの村まで響きました。遠方の船乗りや、また漁師は、神さまにあげた、絵を描いたろうそくの燃えさしを手に入れたものだということで、わざわざ遠いところをやつてきました。そして、ろうそくを買つて山に登り、お宮に参詣して、ろうそくに火をつけてささげ、その燃えて短くなるのを待つて、またそれをいただいて帰りました。だから、夜となく、昼となく、山の上のお宮には、ろうそくの火の絶えたことはありません。殊に、夜は美しく、燈火の光が海の上からも望まれたのであります。

「ほんとうに、ありがたい神さまだ。」という評判は、世間にたちました。それで、急にこの山が名高くなりました。

神さまの評判は、このように高くなりましたけれど、だれも、ろうそくに一心をこめて絵を描いている娘のことを、思うものはなかつたのです。したがつて、その娘をかわいそうに思つた人はなかつたのであります。娘は、疲れて、おりおりは、月のいい夜に、窓から頭を出して、遠い、北の青い、青い、海を恋しがつて、涙ぐんでながめていること

もありました。

四

あるとき、南みなみの方ほうの国くにから、香具師やしが入はいつてきました。なにか北きたの国くにへいって、珍めずらしいものを探さがして、それをば南みなみの国くにへ持もつていって、金かねをもうけようというのであります。

香具師やしは、どこから聞きき込んできたものか、または、いつ娘むすめの姿すがたを見て、ほんとうの人に間まではない、じつに世よに珍めずらしい人魚にんぎよであることを見抜みぬいたものか、ある日ひのこと、こつそりと年寄としより夫婦ふうふのところへやつてきて、娘むすめにはわからないように、大金たいきんを出すから、その人魚にんぎよを売うつてはくれなにかと申もうしたのであります。

年寄としより夫婦ふうふは、最初さいしよのうちには、この娘むすめは、神かみさまがお授さずけになつたのだから、どうして売うることができよう。そんなことをしたら、罰ばちが当あたるといって承知しょうちをしませんでした。香具師やしは一度ど、二度断ことわられてもこりずに、またやつてきました。そして、年としより夫婦ふうふに向むかつて、

「昔むかしから、人魚にんぎよは、不吉ふきつなものとしてある。いまのうちに、手てもとから離はなさないと、き

つと悪いことがある。「と、まことしやかに申ししたのであります。

年より夫婦は、ついに香具師のいうことを信じてしまいました。それに大金になりま
すので、つい金に心を奪われて、娘を香具師に売ることにより約束をきめてしまったのであ
ります。

香具師は、たいそう喜んで帰りました。いずれそのうちに、娘を受け取りにくるといい
ました。

この話を娘が知ったときは、どんなに驚いたでありましよう。内気な、やさしい娘は、
この家から離れて、幾百里も遠い、知らない、熱い南の国へゆくことをおそれました。そ
して、泣いて、年より夫婦に願ったのであります。

「わたしは、どんなにでも働きますから、どうぞ知らない南の国へ売られてゆくことは、
許してくださいまし。」といいました。

しかし、もはや、鬼のような心持ちになつてしまつた年寄り夫婦は、なんといつても、
娘のいうことを聞き入れませんでした。

娘は、へやのうちに閉じこもつて、いつしんにろうそくの絵を描いていました。しかし、
年寄り夫婦はそれを見ても、いじらしいとも、哀れとも、思わなかつたのであります。

月の明るい晩のことです。娘は、独り波の音を聞きながら、身の行く末を思うて悲しんでいました。波の音を聞いていると、なんとなく、遠くの方で、自分を呼んでいるものがあるような気がしましたので、窓から、外をのぞいてみました。けれど、ただ青い、青い海の上に月の光が、はてしなく、照らしているばかりでありました。

娘は、また、すわって、ろうそくに絵を描いていました。すると、このとき、表の方が騒がしかったのです。いつかの香具師が、いよいよこの夜娘を連れにきたのです。大きな鉄格子のはまった、四角な箱を車に乗せてきました。その箱の中には、かつて、とらやししや、ひょうなどを入れたことがあるのです。

このやさしい人魚も、やはり海の中の獣物だというので、とらや、ししと同じように取り扱おうとしたのであります。ほどなく、この箱を娘が見たら、どんなにたまげたりまししょう。

娘は、それとも知らずに、下を向いて、絵を描いていました。そこへ、おじいさんと、おばあさんとが入ってきて、

「さあ、おまえはゆくのだ。」といって、連れだそうとしました。

娘は、手に持っていたろうそくに、せきたてられるので絵を描くことができずに、それ

をみんな赤く塗ぬつてしまいました。
 娘むすめは、赤あかいろうそくを、自分じぶんの悲かなしい思おもい出での記き念ねんに、二、三本残ぼめこしていったのであり
 ます。

五

ほんとうに穏おだやかな晩ばんのことです。おじいさんとおばあさんは、戸とを閉しめて、寝ねてしま
 いました。

真夜中まよなかごろでありました。トン、トン、と、だれか戸とをたたくものがありました。年寄としよ
 りのものですから耳みみさとく、その音おとを聞ききつけて、だれだろうと思おもいました。

「どなた？」と、おばあさんはいいました。

けれどもそれには答こたえがなく、つづけて、トン、トン、と戸とをたたきました。

おばあさんは起おききてきて、戸とを細ほそめにかけて外そとをのぞきました。すると、一人ひとりの色いろの白しろ
 い女おんなが戸口とぐちに立たっていました。

女おんなはろうそくを買かいにきたのです。おばあさんは、すこしでもお金かねがもうかることなら、

けつして、いやな顔つきをしませんでした。

おばあさんは、ろうそくの箱を取り出して女に見せました。そのとき、おばあさんはびつくりしました。女の長い、黒い頭髪がびつしよりと水にぬれて、月の光に輝いていたからであります。女は箱の中から、真っ赤なるろうそくを取り上げました。そして、じつとそれに見入っていました。やがて金を払って、その赤いろうそくを持って帰ってゆきましました。

おばあさんは、燈火のところで、よくその金をしらべてみると、それはお金ではなくて、貝からでありました。おばあさんは、だまされたと思つて、怒つて、家から飛び出して見ましたが、もはや、その女の影は、どちらにも見えなかつたのであります。

その夜のことであります。急に空の模様が変わつて、近ごろにない大暴風雨となりました。ちようど香具師が、娘をおりの中に入れて、船に乗せて、南の方の国へゆく途中、沖にあつたところであります。

「この大暴風雨では、とても、あの船は助かるまい。」と、おじいさんと、おばあさんは、ぶるぶると震えながら、話をしていました。

夜が明けると、沖は真っ暗で、ものすごい景色でありました。その夜、難船をした船

は、数えきれないほどであります。

不思議なことには、その後、赤いろうそくが、山のお宮に点つた晩は、いままで、どんなに天気がよくても、たちまち大あらしとなりました。それから、赤いろうそくは、不吉ということになりました。ろうそく屋の年より夫婦は、神さまの罰が当たつたのだといつて、それぎり、ろうそく屋をやめてしまいました。

しかし、どこからともなく、だれが、お宮に上げるものか、たびたび、赤いろうそくがとまりました。昔は、このお宮にあがつた絵の描いたろうそくの燃えさしさえ持つていれば、けつして、海の上では災難にはかからなかつたものが、今度は、赤いろうそくを見ただけでも、そのものはきつと災難にかかつて、海におぼれて死んだのであります。

たちまち、このうわさが世間に伝わると、もはや、だれも、この山の上のお宮に参詣するものがなくなりしました。こうして、昔、あらたかであつた神さまは、いまは、町の鬼門となつてしまいました。そして、こんなお宮が、この町になければいいものと、うらまぬものはなかつたのであります。

船乗りは、沖から、お宮のある山をながめておそれました。夜になると、この海の上は、なんとなくものすごうございました。はてしもなく、どちらを見まわしても、高い波がう

ねうねとうねつています。そして、岩に砕けては、白いあわが立ち上がっています。月が、雲間からもれて波の面を照らしたときは、まことに気味悪うございました。

真つ暗な、星もみえない、雨の降る晩に、波の上から、赤いろうそくの灯が、漂つて、だんだん高く登つて、いつしか山の上のお宮をさして、ちらちらと動いてゆくのを見たものがあります。

幾年もたたずして、そのふもとの町はほろびて、滅くなつてしまいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「東京朝日新聞」

1921（大正10）年2月16日～20日

※表題は底本では、「赤《あか》いろいろそくと人魚《にんぎよ》」となっています。

※初出時の表題は「赤い蠟燭と人魚」です。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2011年12月31日作成

2012年4月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤いろうそくと人魚

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>